



—一国の要人を奪還する—最も困難な任務を遂行するために
ドイツ軍の精鋭たちがここに集められた
一滴の血を流すことなく達成された、大戦屈指の作戦の全貌！

文=荒川佳夫

ムツンリーニを救出せよ

不可能を可能にした特殊作戦

一九四三年七月二十五日のことである。
ドイツ総統アドルフ・ヒトラーの命により、
東プロイセンにある総統大本営、通称「狼
の巣」の一室に、六名の将校が呼集されて
いた。

ヒトラーはその将校たちを見まわすと、
一人ひとりに同じ質問を投げかけていった。
「イタリア人をどう思う？」

これに対する将校たちの答えは、枢軸同
盟の盟友、味方……といったものだった。
ヒトラーはあいまいにうなずき、最後の一人
となったS大尉に目を向けた。総統護
衛主任ギュンシュがその男の簡単な経歴を
語り出す。

「オットー・スコルツェニー予備役大尉、
国家保安本部所属、フリーデンタール駆逐
戦隊の隊長であります」

ヒトラーはうなずき、その男にも同じ質
問をくり返した。イタリア人をどう思うか
と。

すると、左頬に大きな傷跡を刻んだスコ
ルツェニーは、淀みない口調で答えた。

「総統閣下、私はオーストリア人です」

オーストリアから見れば、イタリア人は南
チロール地方を奪った怨敵で、信用のおけぬ
相手である。言外にそのことを匂わせたス
コルツェニーの心情を、同じオーストリア
出身のヒトラーは悟り、破顔した。

「ほかの者は退がてよろしい。スコルツ
ェニー大尉、君は残りました」

室内に二人だけになると、ヒトラーはさ
っそく用件を話しはじめた。



フリーデンタル駆逐戦隊

め、連合軍の援助さえ求めているのである。開戦以来、ドイツの盟友として常に臂を並べていたイタリアは、戦争からの離脱を望むばかりか、いまや敵側に寝返ろうとしていたのである。

「我が盟友であるイタリアの統領ムッソリーニが政権を逐われ、どこかに監禁されたらしい。後を継いだパドリオ元帥は連合国と停戦交渉を開始しているようだ。放っておけばイタリアは敵となるであろう」

ヒトラーはスコルツェニーを正面から見据えたまま、一呼吸置いてから続けた。

「ムッソリーニの監禁先をつきとめ、彼を救出せねばならない。君にやれるかね？」

スコルツェニーは口もとをゆるめ、歯をむき出して答えた。

「やりがいのある仕事です、総統閣下」

この瞬間に、ドイツ特殊部隊と降下猟兵部隊の協同による、ムッソリーニ救出作戦が動きはじめたのである。

それは、険しい山岳地帯に籠る目標へ、空からの接近を試みるという、前代未聞の救出作戦の始まりであった。

枢軸同盟崩壊の危機

一九四三年の夏、イタリアは混乱の最中であつた。北アフリカの戦いはすでに、チュニジアの陥落をもって枢軸側の敗北に終わっていた。長びく戦争は市民生活を圧迫し、日用品や食糧は次第に不足し始めてい

た。トリノのフィアット社工場が始まったストライキは瞬く間に全国へ波及し、三〇万人規模のストライキへと発展した。

一九四二年以来、ファシスト党の党首と首相を兼任し、統領として政治と軍事の全権を掌握してきたベニト・ムッソリーニは、

諸問題を解決する方策を打ち出せないばかりか、健康状態の悪化（胃潰瘍とも神経梅毒ともいわれる）もあって次第に情緒不安定となり、周囲からの信頼を失っていた。

市民や兵士たちの間には厭戦気分が広まり、民心は指導者であるムッソリーニから離れるばかりとなつた。軍部やファシスト党幹部からも反ムッソリーニの声が上がり始め、その自己保身に裏打ちされた不満の声はやがて、具体的な行動へと昇華されていった。

陸軍参謀総長アンブロシオ大將は国王エマヌエレ三世にムッソリーニの罷免を働きかけ、ファシスト党幹部のグランデイらは、党の大評議会においてムッソリーニを失脚させようと画策し始める。

これらの動きは、七月十日に勃発した非常事態によってさらに加速することになった。その日、総数一五万の連合軍が、シチ

リア島へ上陸を開始したのである。この事態を受け、ついに国王エマヌエレ三世は決断を下した。

七月二十五日、ムッソリーニは国王に謁見した直後、宮殿を辞したところで憲兵隊によって救急車に押し込まれ、どこかへと連れ去られた。「何事か？」と尋ねるムッソリーニに対し、憲兵大尉ウィグネリは「閣下の身辺警護であります」と答えたが、この挙行は逮捕監禁以外の何ものでもなかった。

その日の午後遅く、国王エマヌエレ三世はラジオを通じ、ムッソリーニの「辞任」と、後継首班にエチオピア侵攻で功績のあつたパドリオ元帥を指名した旨を布告した。

このニュースが伝わるに、市民は街にくり出し、歓声を上げて喜びをあらわにした。閉店したはずの酒場もいつせいに臨時営業を始め、街には泥酔者があふれた。彼らはみな、ムッソリーニ政権の崩壊が戦争終結へつながるものと期待し、またそう信じていた。

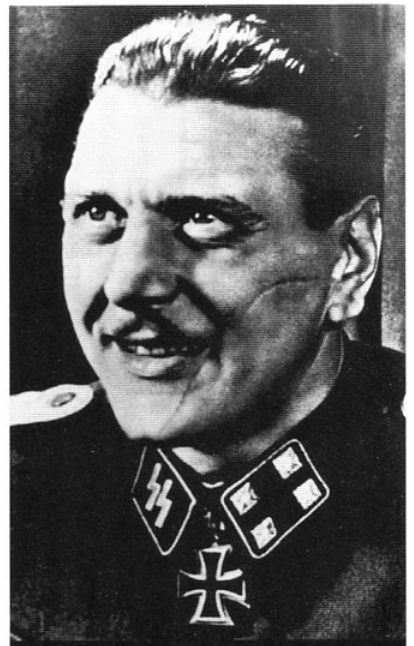
実際にパドリオ政権は、連合国と対等な立場での「名譽ある停戦」を望んでおり、それが実現した際には必ずやイタリアへ侵攻してくるであろうドイツ軍に対抗するた

イタリアでの政変を察知したドイツは、それが戦局にもたらす危険極まりない影響を、充分に承知していた。パドリオ政権が連合国と停戦するとすれば、シチリアに上陸した米・英軍がイタリア本土にまで進駐することになるだろう。戦友であつたイタリア軍も、ドイツに銃口を向けるに違いない。

それは新たな敵の出現を意味するだけでなく、英首相チャーチルが「やわらかい下腹部」と呼んだドイツの側背に第二戦線の構築を許すことにもなる。東部戦線のソ連軍に手こずっている現状では、第二戦線の構築はなんとしても阻止しなければならぬ。

この難局を打開する方策は、二つあつた。ひとつは連合軍が上陸する以前にイタリア全土をドイツ軍の占領下におき、万全の防衛体制を敷くこと。しかしこの手段は、全イタリア人のみならず、周辺国をも敵にまわすことになりかねず、リスクが大きすぎた。

残されたもうひとつの手段は、失脚したムッソリーニを再び担ぎ出すというものだった。この時まだイタリア国内には、声高に主張することはなかったにせよ、ファシ



特殊作戦を次々実行したオットー・スコルツェニーは、連合軍にとって要注意人物の一人だった。その向こう見ずな性格は、若い頃、決闘によって負った顔の傷に象徴されるが、同時に冷静沈着な面も合わせ持っていた。大戦末期のバルジの戦いにおけるグライフ作戦（連合軍の後方における擾乱）も彼が指揮している。

スト体制を支持する人々はいた。彼らをムッソリーニのもとに糾合し、バドリオ政権と王室を打倒したのち、もう一度両国の協力関係を強化して、連合軍の侵攻に備えようというのである。

ドイツは後者の手段を選んだのだが、それにはまず、逮捕監禁されたムッソリーニの居場所を探りだし、彼を救出せねばならない。この任務を遂行するため、SS長官ヒムラーが選抜した救出部隊の隊長候補が、東プロイセンの総統大本営に集められた。それが七月二十五日深夜のことであり、会談の場でヒトラーの目にとまったのが、スコルツェニーSS大尉だったのだ。

オットー・スコルツェニーはこの時三十五歳、一九〇センチを超す身長と、頑強な体躯を持つ男だった。左の頬から顎にかけての傷跡は、ウィーン大学工学部で学んでいた頃のもので、それは伝統的な「決闘クラブ」での、サーベル試合で刻まれた名誉

の負傷だった。

武装親衛隊内に小規模奇襲部隊——いわゆるコマンドー部隊を組織しようと企画された際、スコルツェニーに白羽の矢が立てられたのは、彼が工学部卒業で技術分野に明るく、また過酷な任務に堪えられる肉体をもっていたことが理由であった。

このスコルツェニーを隊長として、一九四三年四月にドイツ初のコマンドー部隊として誕生したのが、フリーデンタール駆逐戦隊であった。この部隊はイギリス・コマンドー部隊を参考に組織され、その人員は編成途上にあつたSS降下猟兵（空挺）部隊や、敵戦線後方への潜入と擾乱を任務とする特別部隊「ブランデンブルク」などから集められた。彼らの多くは数か国語を話せ、落下傘降下や諜報技術などの特殊技能を持つ兵士だった。

この駆逐戦隊は、イギリス軍によってオランダに投下される地下組織向けの消費装

置つき短機関銃やプラスチック爆弾をひそかに横取りし、それをもとに装備を調べていた。訓練は部隊名の由来でもあるフリーデンタールの森林公園を使って行われ、わずか数か月の間で部隊の練度と士気は高められていた。

そして、その彼らが初めて挑む奇襲作戦が、ムッソリーニ救出作戦であった。任務遂行にあたり、スコルツェニーの特殊部隊は、クルト・シュトゥデント大将の空軍第11空挺軍団の指揮下に編入された。シュトゥデント大将の降下猟兵部隊もまた、ムッソリーニ救出を命じられていたのである。

この救出作戦はスコルツェニーの部隊が単独で行ったように伝えられているが、実際に軍事行動の主力となつたのは空軍の降下猟兵部隊である。彼らが襲撃目標を制圧したのち、スコルツェニーがムッソリーニの身柄を確保し、これを護送するというのが、本来の計画であつたのだ。

ともあれ、ムッソリーニ救出作戦は動き始めた。それは時間との勝負でもあつた。バドリオ政権が連合国との間に停戦協定を結ぶより早く、再びイタリアの地にファシスト政権を樹立させねばならない。

総統大本営でシュトゥデント大将との打ち合わせを終えたスコルツェニーは、ベルリン郊外で待機していた副隊長ラドルに電報を打ち、イタリア語を話せる二〇名の隊員を選抜し、各種装備を用意してローマへ向かうよう指示すると、自らも機上の人となつた。

ついに、賽は投げられたのである。

ムッソリーニを捜せ

七月二十六日、じりじりと照りつける陽光の下、スコルツェニーはローマへと到着した。市内には戒厳令が布かれていたが、取り立てて混乱している様子はなく、駐留するドイツ軍兵士も、枢軸同盟からのイタリアの脱退を想像すらしていないのか、それほど緊張しているようには見えなかった。不思議な静けさの中で、スコルツェニーたちはムッソリーニの居場所を探り始めた。しかし、計画を秘匿せねばならない状況では表だって探りを入れるわけにもいかず、断片的に伝わってくる情報を集める以外に為すすべはなかった。

有力な情報をつかめぬまま二週間が過ぎ去つたある日、ひとつの情報がスコルツェニーのもとへ飛びこんできた。それは、政治犯を収監する流刑地であるボンツァ島に、ムッソリーニが監禁されているというものだった。

情報をもたらししたのは、ボンツァ島の向かいに位置する本土の町、テラチノに住む果物商だった。行商に各地をまわる商人なら顔も広く、さまざまな噂を聞きつけるだろうと睨んだスコルツェニーたちは、この果物商に接触していたのである。

その果物商が言うには、得意先の女性の婚約者がボンツァ島に勤務する警察官なのだが、この二週間ほど、その警察官が島から帰つてこないらしい。この話を聞いたス

ムッソリーニを救出せよ

OPERATION OAK TREE

ムッソリーニの足取りと救出



- ① 7月25日にローマで逮捕されたムッソリーニはポンツァ島へ移送。
- ② ポンツァ島からラ・マッダレーナ島に移送。③ コルノ山のグラン・サッソに移送。④ 9月12日、スコルツェニー、ムッソリーニを救出。ローマを経由して⑤ オーストリアのウィーンへ。

コルツェニーたちは、ポンツァ島の警備が強化されたのだと判断した。

この時期、厳重警備せねばならない重要な政治犯といえば、ムッソリーニ以外に考えられない。この推察は、ムッソリーニをポンツァ島へ運んだと証言する砲艦の乗組員を見つけたことで裏づけられた。

スコルツェニーからの報告を受けたヒトラーは、ただちにポンツァ島へ乗り込んでムッソリーニを救出せよとの命令を発したが、スコルツェニーたちが作戦計画を練り上げるより早く、別の情報がいち早く入ってきた。ムッソリーニはすでに、別の場所へ移されたというのである。

八月六日、スコルツェニーはワイゼラー・シュトルヒ連絡機を手配し、実際にポ

ンツァ島の様子を上空から探ってみることにした。すると、警備が厳重であるような様子はなく、ムッソリーニを運んだとされる砲艦も、すでに港から姿を消していた。

ここに目標はいない……そう判断せざるを得なかった。ムッソリーニ探索は、また振り出しに戻ってしまった。

実はこの時、ドイツが救出部隊をさし向けることを恐れたイタリア新政府は、ムッソリーニを別の場所へと移送していたのである。スコルツェニーらは、一足ちがいで目標を取り逃がしたのだ。

しかしここで落胆するわけにはいかなかった。パドリオ新政権は中立国ポルトガルに特使を派遣し、イギリス外交筋と接触して停戦交渉を進めようとしていた。一刻も

早くムッソリーニを捜し出し、イタリアが戦争から離脱することを阻止しなければならぬ。

再び情報の断片を集め始めたスコルツェニーらは、サルジニア島北端に位置するラ・マッダレーナ島へ定期的に寄港していたドイツ海軍魚雷艇から、同島の警備が突如として強化され、イタリア海軍司令部との直通電話線が敷かれた、との報告を受けた。スコルツェニーはただちに、その情報の真否を探るべく、イタリア語を完璧に話せる海軍中尉ワルガーを引きつけ、ラ・マッダレーナ島に潜入した。

スコルツェニーが海岸の様子を見て回る一方、イタリア語が堪能なワルガーは酒場を巡り、飲み酒を無理やり胃に流し込みつつ、情報を収集した。彼は強烈な吐き気や体中の震えと引き替えに、有力な情報を得ることに成功する。酒場から入ってきた農夫の一人が、ケルン荘という邸宅に果物や野菜を納めていると話し始めたのだ。彼が言うには、その邸宅には最近、だれかが住み着いたらしい。

このあいまいな情報は、ドイツ大使館付き警察主任カプラーがもたらした一報により、裏づけられることになった。イタリア人郵便局員を買収したカプラーは、ムッソリーニの娘が父親に宛てた手紙を入手したという。その手紙の宛先はラ・マッダレーナ島であった。

八月十八日、確信を強めたスコルツェニーは、またも空から島内を偵察しようと、

シュトルヒ連絡機に搭乗した。だが、突然エンジンが不調となり、スコルツェニーを乗せたシュトルヒは海上に不時着水してしまった。海軍の魚雷艇に救助されたスコルツェニーだったが、空からの偵察は失敗に終わった。しかし、救助された彼のもとに、島に残って偵察を続けていた部下からの報告が届けられた。ケルン荘のベランダに、海を見つめるムッソリーニらしき人物を確認したというのである。

ただちに救出作戦を実行に移すべく準備を開始したスコルツェニーたちだったが、ここへきてベルリンから別の情報が飛び込んできた。それによると、ドイツ国防軍諜報部がムッソリーニの居場所をつきとめ、しかもその場所は、スコルツェニーらが確信したラ・マッダレーナ島ではなく、ナポリレオンの流刑地としても有名なエルバ島だというのである。

自ら掻き集めた情報を否定されたスコルツェニーは激怒した。ナチス政権に対して批判的な国防軍諜報部長官のカナリス提督が、わざと誤った情報を流しているのではないかとさえ疑うほどだった。

ローマからの抗議では埒があかないと判断したスコルツェニーは、どちらの情報も正しいかヒトラーの前で白黒つけるべく、副隊長ラドルをつれ、ローマを発つたのだ。

ラ・マッダレーナ島襲撃作戦

総統大本営に到着したスコルツェニーは、

シュトゥデント大将のはからいにより、ヒトラーに謁見する機会を得た。

彼はヒトラーや居並ぶ高級将校の前にして、自分たちの集めた情報を披瀝し、ラ・マッダレーナ島こそがムッソリーニの監禁場所であると、三〇分にもわたって説得を続けた。

ヒトラーはスコルツェニーの説明を聞き終えると、感銘を受けたような表情で前に進み出て、自ら大柄なSS大尉の手を握り、こう言った。

「君を信じよう。エルバ島の件は取り下げよう」

さらにヒトラーは、スコルツェニーを見つめながら尋ねた。

「ところで、ラ・マッダレーナ島への襲撃計画だが、君は草案を持っているのかね？あるのならここで披露したまえ」

スコルツェニーはうなずき、すでにシュトゥデント大将の承認を得ていた自らの計画を説明し始めた。

それは、ラ・マッダレーナ島の港へ定期的にドイツ海軍艦艇が入港することを利用した計画だった。フリーデンタール駆逐戦隊の隊員が乗り込んだ魚雷艇や掃海艇を演習の名目で港に入港させ、これら艦艇が装備する火炮の支援を受けつつ、堂々と上陸しようというのである。完全装備の兵士をケルン荘に向けて行進させれば、イタリアの守備兵は度肝を抜かれ、交戦する意欲をなくすだろう……というのがスコルツェニーの算段だった。

高級将校の中には、この大胆な計画に呆然となった者もいたが、ヒトラーはこれを承認した。だがそれと同時に、総統はスコルツェニーに警告することも忘れなかった。

「イタリアはまだ、名目上は同盟国だ。もしこの計画が失敗したとしても、ドイツ政府としては君たちを保護することはできない。野心に取りつかれた君が、命令を無視して独断で行動したのだと発表せねばならない。わかるな？」

スコルツェニーはヒトラーの言葉を噛みしめ、何度も重たしくうなずいた。最後にヒトラーは、もう一度彼の手を握り、強い口調で言った。

「君ならやれるはずだ」

確信に満ちたヒトラーの言葉が、スコルツェニーに力を与えた。彼はすぐさまローマへ舞い戻り、ラ・マッダレーナ襲撃計画を具体化する作業を開始した。

そして八月二十七日、ついにスコルツェニーの計画は実行に移された。救出部隊は数隻の小型艦艇に分乗し、ラ・マッダレーナの港に入港することに成功した。作戦実施時刻は明朝六時。兵士たちは狭い艇内で一夜を明かすことになった。

スコルツェニーとイタリア語の堪能なワルガー中尉は、事前偵察のため、船員に変装して上陸し、ムッソリーニが監禁されていると噂んだケルン荘へと近づいていった。便宜をもよおしたふりをして岩陰に隠れたスコルツェニーは、ケルン荘を見下ろすことのできる丘の上まで匍匐前進し、そこ

から邸宅内を観察した。

ここで、スコルツェニーは奇妙なことに気がついた。ケルン荘を警備している兵士たちから、まったく緊張感が感じられないのだ。本当にここが監禁場所なのだろうか？

不審がりながらスコルツェニーがワルガー中尉のもとへ戻ると、彼は洗濯場にいたイタリア人警備兵の一人と談笑しているところだった。スコルツェニーもその話に加わり、つたないイタリア語で天候や女性の話題をふり、兵士とうち解けようと試みた。

やがてワルガー中尉が、かまを掛けるように尋ねた。

「ムッソリーニは死んだそうだな？ ドイツ語放送がそう伝えていたぜ」

「私も知りあいの医者からそう聞いた」

とスコルツェニーも同調し、相づちを打つ。

警備兵は、とたんに警戒した顔つきになったが、ムッソリーニの死については否定した。そこでスコルツェニーたちは、わざと逆なできるように追い打ちをかけた。

「ドイツ語放送は嘘は言わない。ムッソリーニは死んだのださ」

するとその警備兵は顔を真っ赤にし、喚きはじめた。

「そんなことはない！ だいいち、俺は今朝ムッソリーニ閣下に会ってるんだ。閣下

が飛行艇でこの島を離れるのを護衛して見送ったのは、ほかならぬこの俺なんだからな」

スコルツェニーらの目の前は、一瞬のうちに真つ暗になった。やはりこの島にムッソリーニはいた。だが、今度も一足ちがいで、彼を取り逃がしてしまつたのだ。警備兵の話によれば、彼は白い飛行艇に乗せられ、いずこともなく飛びさつたという。

実のところ、ドイツ海軍小部隊が演習目的で寄港することを知ったイタリア側は、この突然の行動を訝り、救出作戦を警戒してムッソリーニの移送を決定したのであつ



ムッソリーニが収容されていたホテル。グラン・サッソは観光地であるが、標高2000mという高台にあり、監禁場所としては最適であった。

ムッソリーニを救出せよ

OPERATION OAK TREE



ロープウェイを占拠したドイツ降下猟兵たち。地上からのルートはこのロープウェイしかなかった。(Paolo Marzetti氏提供)

作戦名「オークツリー」

九月一日、暗闇の中で手探りを続けるス

た。
こうして、ケルン荘への襲撃作戦は中止となった。またムッソリーニの足取りはつかめなくなり、スコルツェニたちは深い落胆の谷底へと突き落とされた。
だが、ここであきらめるわけにはいかなかった。スコルツェニは自らを、そして部下たちを奮い立たせ、再び断片的な情報の収集を開始した。あやふやな憶測や、根拠のない噂話の類を集め、探りを入れてゆく作業を重ねたが、そのどれもが空振りに終わる日々が続いた。
だがそれ以外に、今彼らに為すべきことは、なにも残されてはいなかったのである。

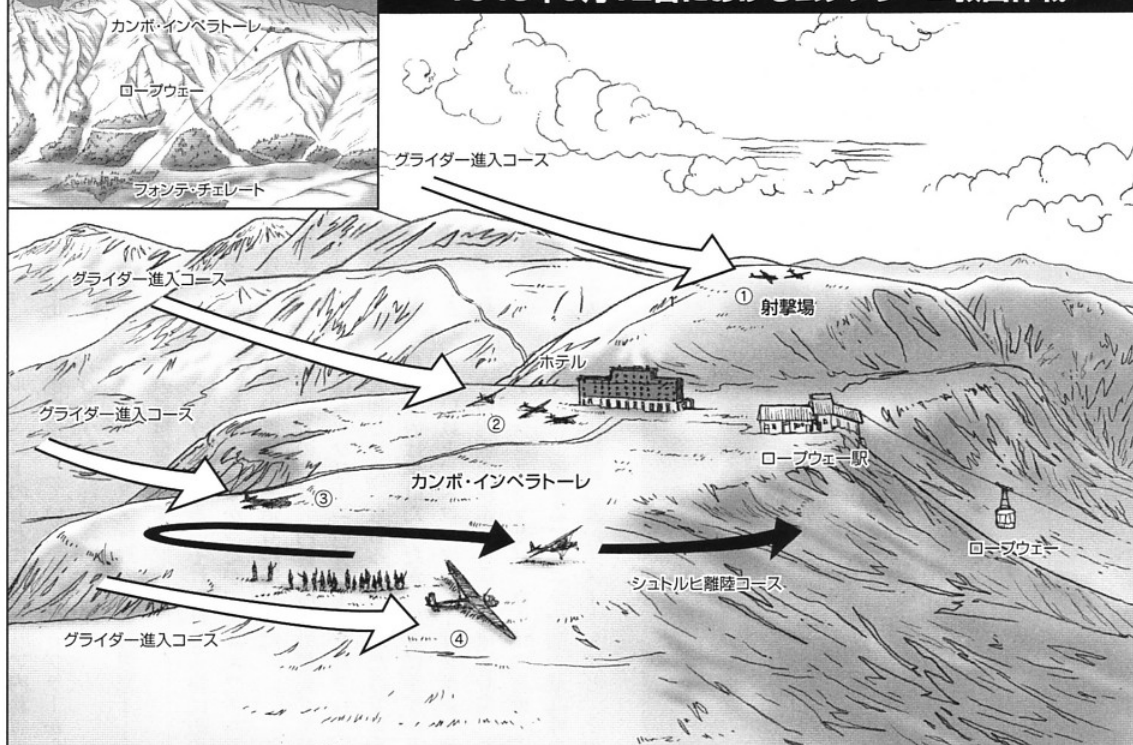
コルツェニのもとに、イタリア内務省の無電を傍受していた警察主任カブラーから、次のような報告が舞い込んだ。
「グラン・サツソ付近の警備対策完了……この無電を傍受せり」
というのである。それだけなら特にあやしいものではなかったが、スコルツェニはその無電の発信者に注目した。
発信者の名は、内務省所属の警視グエリ。彼はムッソリーニの警備主任と目されていて、人物だった。もちろん、それだけで結論を出すのは早計だったが、ほかに手がかりがない以上、スコルツェニはグラン・サツソの周辺を搜索することを決定した。
グラン・サツソとは、ローマの北東二二〇キロに位置するアペニン山脈の最高峰コルノ山（標高二九一二メートル）と、その

一帯の山塊をさす地名で、石灰岩質の険しいカルスト地形が見られることと、スキーや登山の名所であることで知られていた。
グラン・サツソについての情報を集め始めたスコルツェニらだったが、その保養施設は開戦の直前に完成したため、軍用地図や登山用の地図には詳しい情報は記載されておらず、観光用のパンフレットだけが彼らの頼りとなった。
それによると、コルノ山の中腹、標高二〇〇メートル付近にはウインタースポーツ用の施設があり、その中心にはホテル・カンボ・インペラトリーが建設されているという。険しい山岳地帯の中でムッソリーニを監禁するような建物といえば、このホテル以外に考えられなかった。しかもそこに近づく手段は、険しい崖をよじ登るか、麓の村からつながるロープウェイを利用する以外にはなかった。そこは要人を匿うには、まさに絶好の場所だったのだ。
ロープウェイの駅を偵察したところ、カラビニエリ（憲兵隊）によって厳重に警備されていることが確認された。これこそ、コルノ山のホテルに要人がいることの証明ではないのか？ 今や、あやふやな情報をつなぎ合わせた希望的観測は確信に変わりつつあった。スコルツェニはシュトゥデント大將とともにハインケルHe III爆撃機に搭乗し、グラン・サツソ周辺に対する空からの偵察を開始した。

問題のホテルは雪に覆われた小さな台地上に築かれ、周辺は岩場で囲まれていた。
ホテルの裏手にあたる北側には、三角形をなす草の生えた空き地があった。スコルツェニたちはその空き地が、パンフレットにあった射撃場であろうと見当をつけた。
さらに、ケーブルカー駅に到着する険しい山道にも、カラビニエリが配置され、厳重に警備されていることが判明した。そのことは駅の警備とあわせ、スコルツェニたちの推論に確証を与えることになった。後は救出方法を策定し、実行に移すだけである。
彼らにはあまり多くの時間は残されていなかった。偵察を行っていた九月三日には、シチリアの連合軍がメッシナ海峡を押し渡り、イタリア本土への侵攻を開始していた。そして九月八日、ついにドイツ側が恐れていた事態が現実となる。イタリアは連合国の前に降伏し、枢軸同盟から脱落したのである。事ここにいよいよ、ヒトラーはイタリア占領作戦「枢軸」の発動を命じ、九月十日には首都ローマがドイツ軍の占領下におかれることになった。
しかし、この事態の変化でスコルツェニたちの役目が終わったわけではなかった。ドイツがイタリアを支配下におくにしても、やはりムッソリーニの存在は必要だったのだ。
彼を救出する方法には、空からの奇襲作戦が選択された。麓から攻め上がった場合、救出部隊が標高二〇〇〇メートルのホテルにたどり着くまでの間に、ムッソリーニが殺害される恐れがあると判断されたからである。



1943年9月12日におけるムッソリーニ救出作戦



ムッソリーニが幽閉されていたホテルは、麓の町からロープウェイで結ばれたグラン・サッソ山中腹のS字形をした棚地カンボ・インペラトール（皇帝の野。標高2130m）に位置していた。現存する記録映像からはグライダー部隊は、①ホテル裏の空き地や②ホテル左横、または③正面手前の草地や④行き止まり等数か所に着陸が確認できる。またゲルラッハ大尉操縦のシュトルヒは、離陸前に一度左に進んでからターンしてとうとうかかえる。（イラスト／解説 吉川和篤）

とはいえ、山岳地であるグラン・サッソ上空にはパラシュート降下を困難にする不規則な風が吹いており、しかも輸送機の到達高度から標高二〇〇〇メートルの地点に降下すると、降下時間が極端に短くなり、危険極まりなかった。そこで代案として、グライダーによる強行着陸作戦が立案された。グライダーの着陸地点には、ホテルの裏手にあった射撃場の空き地が選ばれた。

この降下作戦では、シュトゥデント大將麾下の第11空挺軍団の降下猟兵が主力となる。しかし麾下部隊の第1および第2降下猟兵師団はローマ近郊の戦闘に投入されており、救出作戦のために兵力を抽出することができない。そこでモルス少佐を隊長とする落下傘訓練大隊を実戦に投入することになり、モルスはグライダーに乗り込む一箇中隊を選抜するよう命じられた。

「オークツリー」と名づけられた作戦の決行日は九月十二日、発起時刻は午前六時と定められ、奇襲に使用される二機のDF S 230グライダーと、それを牽引するヘンシエルHs 126偵察機は、ローマ南西のブラクテ

イカ・ディ・マレ飛行場に集結するよう命じられた。
パイロットも含め一〇名の兵員が搭乗できるDFSグライダーには、落下傘訓練大隊より選抜されたベルレブシユ中尉指揮の一個中隊八名と、スコルツェニーのフリーデンタール駆逐戦隊二六名が乗り込むことになった。

作戦の内容は、グライダー部隊がグラン・サッソに降下してムッソリーニを救出すると同時に、モルス少佐直率の落下傘訓練大隊が山麓のロープウェイの駅を占領し、撤退ルートを確保する、というものだった。スコルツェニーとシュトゥデントは、グライダーによる空からの奇襲はイタリア人を驚嘆させ、迅速な応戦を封じることができると確信していた。

すべての算段が整えられた九月十一日の夜、最後のブリーフィングが行われた。ここでスコルツェニーは、参加をためらう者は辞退してもよろしいと呼びかけたが、これに応じる者は皆無であった。

驚は舞い降りた

九月十一日深夜、モルス少佐の大隊から、作戦発起時刻までにロープウェイ駅に到達できないとの報告を受けたため、新たな発起時間が午後二時と変更された。

十二日の午前九時、ブラクティカ・ディ・マレ飛行場に救出部隊が集結した。その中には、スコルツェニーによって連れてこられたイタリアのソレティ將軍の姿もあっ

ムッソリーニを救出せよ

OPERATION OAK TREE

た。彼の役目は、カラビニエリに降伏勧告を行い、無駄な血を流さぬよう説得することであった。

午後一時、いよいよグライダーを曳航するヘンシエル機が滑走路を動きはじめた。先頭の二機のグライダーには降下猟兵が搭乗していた。彼らの役目は先行して強行着陸し、後続機が安全に着陸できるよう降下地点を確保することだった。スコルツェニとその部下は第二陣、三番機と四番機に搭乗していた。

先頭のグライダーを曳航するヘンシエル機の操縦桿は、曳航機部隊の指揮官ラングート大尉が握っていた。大尉は、前方に横たわる標高三〇〇メートルの山岳を全機が安全に越えられるようにと、旋回しながらの上昇行動に移った。

しかし、この隊長機の行動に従ったのは二番機のみで、後続機は隊長機に追従せず、そのままずっと飛びさってしまった。ヘンシエル機には無線機が搭載されていなかったため、編隊を組みなおすことができず、スコルツェニの三番機が先頭を進むことになった。

雲が多く視界の悪い中、高度三〇〇メートルを突きすんだ奇襲部隊は、途中でさらに一機がはぐれたものの、敵機に遭遇することもなく、大部分がグラン・サツソ上空へと到達した。眼下に曲がりくねった谷が出現し、コルノ山の山腹にはホテル・カンポ・インペラトリーレの建物が見え始めた。

先行して着陸するはずの一番機と二番機は脱落したままだったが、スコルツェニはためらわず、三番機を先頭にグラン・サツソへ突入することを決め、全員にヘルメットの着用を命じた。着陸目標は当初の予定通り、ホテル北側の空き地である。

曳航機から切り離されたグライダーは、大きな円を描いて旋回し、徐々に高度を下げ始めた。着陸予定地点は草の生える空き地とはいえ、急な傾斜地になっており、大小の石が転がっていた。お世辞にも着陸しやすい場所ではないが、パイロットのマイヤー中尉はためらわず、グライダーを急速降下させた。

次の瞬間、機体は地面にぶつかり、石の上を跳びはねるように滑走した。パラシュート・ブレーキが開かれ、スコルツェニのグライダーは台地上に停止した。

フリーデントール駆逐戦隊の兵士たちは短機関銃を手に次々とグライダーから飛び降り、スコルツェニもそれに続いた。上空には後続機が舞っており、曳航機のエンジンの唸りがあたりに響いていた。スコルツェニたちは岩場を走り、ホテルへと近づいた。

同行したソレティ將軍が「撃つな！」と叫んでいたが、その必要もないようだった。警備にあたっていたカラビニエリは突然のことに唖然とし、銃をかまえることも忘れていた。

スコルツェニはロープウェーの終着点を確認するよう命じると、軍曹一人を連れ

てホテルの内部へと突入した。地下室のほうからは警察犬の吠え声が聞こえるが、銃声はまったく響いていなかった。彼らはまさきに通信室に駆けこむと、そこにいたカラビニエリを殴り倒し、無線機を叩き壊した。

その部屋には内部へと続く扉がなかったため、二人はいったん外に出て、テラスをまわって別の扉から再びホテルへ侵入した。その頃には、一機が着陸に失敗したものの、後続のグライダー群は続々と着陸し、大勢のドイツ兵がホテルを取り囲み始めていた。

カラビニエリたちは、もとより戦う気がなかったのか、反撃することもなく逃げまどっていた。

ホテルから逃亡しようとするイタリア人をかき分けて二階へ駆け上がったスコルツェニたちは、そこで二人の男に付き添われたムッソリーニを発見した。その二人の男は、内務省から派遣されていたグエリ警視と、カラビニエリ隊長のファイオラ中尉だった。彼らはまったく抵抗する素振りを見せず、素直に両手を上げた。スコルツェニは安堵し、ムッソリーニに向かって言った。



シュトルヒ連絡機に乗り込もうとしているムッソリーニとスコルツェニ。政治的宣伝工作のために映像班も参加していたため、特殊作戦にもかかわらず映像が残されている。(Paolo Marzetti氏提供)

「総統の命令で迎えに上がりました」
これに対しムッソリーニは、やつれた顔に笑みを浮かべ、スコルツェニを抱擁しながら応えた。

「我が友アドルフが、私を見捨てるはずがないと信じていた」
うなずいたスコルツェニは、憲兵隊長と警視に向きなおし、降伏を要求した。警



シュトルヒに乗り込むムッソリーニ（黒い帽子を被った人物）。救出はされたものの、以後の運命は悲惨だった。（Franco Mesturini氏提供）

備責任者のグエリ警視はすぐには応えず、少し待つように言う。と部屋の中へ消えた。しばらくして戻ってきた彼の手に、ワインのボトルとグラスが握られていた。

「勝利者に乾杯」

そう言う。グラスにワインをそそいだ警視は、それを一気に飲み干した。

午後二時一七分。すべてのカラビニエリが武装解除に応じ、ホテルの窓からは白旗代わりのシートがたれ下がった。この時、麓のロープウェイ駅でも、カラビニエリたちは無抵抗で武装解除に応じていた。スコルツェーニの三番機の着陸からわずか数分、一発の銃弾を使うこともなく、障害は取り除かれた。

あとはムッソリーニを脱出させるだけで

あった。それは計画の当初より、安全で迅速な航空機による移送と決められていた。すでにグラン・サッソの頂上付近には、二機のシュトルヒ連絡機が着陸していた。シュトゥデント大尉の専属パイロットである

ゲルラッハ大尉の操縦する一番機にムッソリーニが、二番機に護衛役のスコルツェーニが搭乗する予定であった。

だが、そのうちの二番機は、着陸の際に主脚を損傷してしまい、離陸が不可能になっていた。ここでスコルツェーニは、自分も一番機に搭乗すると主張し始めた。しかしシュトルヒは二人乗りであるし、体重九五キロのスコルツェーニが搭乗したのでは、過荷重となって離陸が難しい。ゲルラッハは危険すぎると抵抗したが、「何事かが起こ

った場合、私がムッソリーニ氏を射殺せねばならないのだ」というスコルツェーニの言葉に、ついに折れるしかなかった。

午後四時三〇分、助手席にムッソリーニを乗せ、スコルツェーニを座席の後ろのわずかなスペースに詰め込んだゲルラッハのシュトルヒは、急斜面を駆け降り始めた。行く手には断崖が口を開けている。ガタガタと機体を震わせながら滑走したシュトルヒは、瞬く間に崖淵にさしかかり、車輪を岩にぶつけて大きく傾いた。そのまま飛び上がったかと思うと、崖下へと消えていった。墜落か……と思われたが、ゲルラッハの操縦するシュトルヒの翼は、みごとに風をつかまえていた。滑空した機体は低空で水平に戻ると、そのまま谷間にそって飛行し始めた。行く先はブラクティカ・ディ・マレ飛行場で、そこでムッソリーニはハインケルHe111爆撃機に乗り替え、ひとまずウィーンへと運ばれる手はずとなっていた。

あとに残った降下猟兵やフリーデンタール駆逐戦隊の兵士たちは、確保したロープウェイを使い、悠然とグラン・サッソから引き揚げていった。

ムッソリーニを救出する奇襲作戦は、あつけないほどの短時間で、成功裡に終結したのである。

その後のイタリア

こうして、ムッソリーニは連合国に引き渡されることもなく、解放された。しかし彼のもとにファシスト勢力を結集するとい

うドイツの目論見は、すでに瓦解しつつあった。サレルノに上陸した連合軍は北上を開始し、ローマの南側に築かれたドイツ軍の防衛線「グスタフ・ライン」に迫りつつあった。共同戦線を構築するはずだった肝心のイタリア軍は、ドイツ軍自身の手で武装解除され、兵員は散り散りになり、もはや戦力とは呼べなかった。

九月二十九日、ムッソリーニは北部イタリアのロッカ・デル・カミナートにおいてイタリア社会共和国（RSI）の首班に就任したことを宣言したが、それはもはやドイツの傀儡にすぎなかった。

当然の事ながらこの新政権は民衆からの支持を集められず、ドイツ軍占領地域ではバルチザンの活動が活発化し始める。さらに十月十三日には、連合軍の前に降伏したイタリア新政権がドイツに宣戦を布告。イタリア人は敵味方に別れて血を流すことになるのである。

ムッソリーニはその後、一九四五年四月二十八日、愛人共々バルチザンに捕らえられ、処刑されてしまうのだが、それでも二派に分かれたイタリア国内の戦いは終わらなかった。それは、ベルリンが陥落し、ヒトラーの死をもってヨーロッパの戦争が終結する直前まで継続され、多くのイタリア人の血が流され続けるのである。

グラン・サッソでのあざやかな救出劇は、特殊部隊による奇襲攻撃の有効性を世界に示したのだが、イタリア人には悲劇以外の何ものも、もたらしはしなかったのである。